

一 乘此宝乘 直至道場の事

仰せに云はく、此の經文は我等衆生の煩惱即菩提・生死即涅槃を明かしたり。其の故は文句の五に云はく「此の因易はること無き故に直至と云ふ」と。此の釈の心は、爾前の心は煩惱を捨て生死を厭ひて別に菩提涅槃を求めたり。法華經の意は煩惱即菩提・生死即涅槃と云へり。直と即とは同じ事なり。所詮日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者の住处即寂光土と心得べきなり。然れば此の宝乘に乗じて忽ちに妙覺極果の位に至るを直至道場とは云ふなり。直至と云ふ文の意は四十二位を愛にて極めたり。此の直の一字は地獄即寂光・餓鬼即寂光土なり。法華經の行者の住处は山谷曠野なりとも直至道場なり。道場とは究竟の寂光なり。仍って乗此宝乗の上の乗は法華の行者なり。此の品の意にては中根の四大声聞なり。総じては一切衆生の事なり。今末法に入りては日蓮等の類なり。宝乗の乗は大 白 牛車の妙法蓮華經なり。然れば上の乗は能乗、下の乗は所乗なり。宝乗は蓮華なり。釈迦・多宝等の諸仏も此の宝乗に乗じ玉へり。是を提婆品に重ねて説く時「若在仏前蓮華化生」と。釈迦・多宝の二仏は我等が己心なり。此の己心の法華經に値ひ奉りて成仏するを願はさんとして、釈迦・多宝二仏並座し乗此宝乗直至道場を願はし玉へり。此の乗とは車なり、車は蓮華なり。此の蓮華の上の妙法は我等が生 死の二法・二仏なり。直至の至は此より彼へ至るの至には非ず、住处即寂光と云ふを至とは云ふなり。此の宝乗の宝は七宝の大車なり。七宝は即ち頭上の七穴、七穴は即ち末法の要法南無妙法蓮華經是なり。此の題目の五字、我等衆生の為には三途の河にては船となり、紅蓮地獄にては寒をのぞき、焦熱地獄にては涼風となり、死出の山にては蓮華となり、渴せる時は水となり、飢ゑたる時は食となり、裸なる時は衣となり、妻となり子となり眷属となり家となり、無窮の応用を施して一切衆生を利益し給ふなり。直至道場とは是なり。仍って此の身取りも直さず寂光土に居るを直至道場とは云ふなり。直の字に心を留めて之を案ずべし云云。